

# 日本篆刻家協会会報

第1号 平成20年10月1日発行  
発行：日本篆刻家協会  
563-0032 池田市石橋2-2-10-203  
TEL 072-760-3852  
FAX 072-760-3853

## 会報創刊によせて

日本篆刻家協会理事長 山下方亭



このたび理事長に就任いたしました山下方亭でございます。今後ともよろしくお願いたします。

会員の皆さまには日頃から協会の運営にご協力賜わり深く感謝いたします。さてこのたび、かねてから当協会の懸案事項でありました会報がいよいよ発行の運びとなり、協会の動静を皆さまにお届けできることになりました。

このたびの第二十四回日本篆刻展は中国芸術院との併催展として開催、寿山石芸術展が盛大に無事終了いたしました。多くの観客や会員に展覧会や授賞式にご参加いただきました。その盛会を会報をもって少しでもお伝えできればと願っています。今後はこの会報が会員皆さまと協会を結ぶ紐帯として、さらに会員相互の交流の場として活動情報と近況等お伝えできればその意義は計り知れません。

今後年二回の発行により展覧会の開催要項から開催の模様や結果を全会員にご報告したいと存じます。どうか会報によつて協会の現状をご理解いただき、その運営に会員皆さまの建設的なご意見を寄せいただきますようお願いいたします。

当協会は創立時から梅舒適理事長のご指導の許、年々会員を増加してまいりました。しかし今や少子高齢化の波はここにも押し寄せております。当協会は展覧会や研究会、研修会を開催して篆刻作品の向上を目指すことは永遠の使命でありますが、一方篆刻を楽しく学んで教養を深める生涯学習の場としての協会の果たす役割も大切であります。これからは『頂点を高く、裾野を広く』の方針で、皆さまが篆刻をやっていてよかった、人生が豊かになったと言われる日本篆刻家協会という組織造りを進めたいと思っております。

## 日本篆刻家協会総会報告



平成二〇年度総会が二月十七日、明石市のグリーンヒルホテル明石で開催され、二六〇人が出席した。

総会に先立って午後一時から第二回理事会が開かれ、新理事長に、梅舒適先生の勇退後理事長代行を務めてきた山下方亭氏を選出した。総会前の準備確認をはじめ、今後の協会について協議された。

午後二時から開催された総会に、五月の日本篆刻展に併催する「寿山石展」の協議のため来日中の中国芸術研究院訪日団三人が来賓参加した。賈磊磊団長が



挨拶し、中国芸術研究院の歴史と現況の説明と日中文化交流への期待を述べた。議事は山下理事長代行が議長を務め、平成一九年度事業報告、同決算報告、同会計監査報告、規約の一部改定、平成二〇年度役員選出、同事業計画案、同予算案が提案されいづれも原案通り承認決定された。総会で承認された山下新理事長は今後の運営方針を述べ、会員の皆さまのためになる協会に、役員皆が愛着をもって取り組んでほしいと呼びかけた。総会に引き続き講演会が開催された。講師は京都大学人文研講師大野修作氏、「篆刻前史・述書賦・学古編を中心に」と題して講演した。

続いて午後四時から懇親会が開かれた。中国芸術研究院訪日団、大野講師他の来賓を囲んで和気藹々とした雰囲気が進められ、全国各地からの参加者は交流を深めていた。



第24回

## 日本篆刻展開催

中国寿山石篆刻芸術展を併催

第二十四回となる日本篆刻展が五月二〇日から二五日まで大阪天王寺公園内の大阪市立美術館地下展示会室で開催された。例年の特別展観蘭言室蔵「中国古印材」とともに、今年には特別展として、本年四月に中国北京で開催された「中国寿山石篆刻芸術展」の一部を展観する初の海外展が併催された。

総出品点数二千点近くに及ぶ北海道から沖縄県まで各都道府県から参加する篆刻のみの全国公募展は、わが国唯一であり最大規模のもので、日本の篆刻界に少なからず影響を与えてきたが、創設者である梅舒適理事長が勇退され新体制になって初めての取り組みとなる展覧会である。



## 審査

展覧会は年初の募集要項の配付からスタートし、二月二十八日の書類搬入から出品票受付、作品受付、搬入と進み、三月二十九日三十日の二日間をかけた二人の審査員により鑑別・審査が厳密・慎重に行われた。最初に公募作品の鑑審査が行わ

## 陳列

五月一九日役員、実行委員により例年の大阪市立美術館地下展示会室の第三室第四室の二室を使い、公募、会員、委員、常任委員、評議員以上の役員の全出品作品が壁面に掛けられた。

併せて大きく壁面を取り「中国寿山石



れ九二点に会員推薦賞が贈られることとなった。審査では別記の梅舒適賞・大賞・準大賞をはじめ、委員の作品から奨励賞七五点、会員の作品から特選八三五点、秀作一四〇点が入賞作品に選ばれた。

篆刻芸術展の一部をなす論語と道德經の作品を壁面に、その下の展示台上にその印材が展観された。また併せて、蘭言室蔵「中国古印材」がガラスケースに収めて特別展観されることとなった。



## 展覧会

第二十四回日本篆刻展が五月二〇日から二五日まで大阪市立美術館地下展覧会室で開催された。正副理事長三名、名誉理事三名、代表理事五名、常務理事一八名、理事二七名、監事五名、参与七名、評議員九三名の役員その他、常任委員二三五名、委員二五七名、会員四四五名、公募九二名、計一一九〇点の作品と特別展観蘭言室蔵「中国古印材」二八点が展観された。特別展として中国第一回寿山石篆刻芸術展が併催され、期間中二一六三人が入場する盛会となりました。

(詳細五ページ研究院への報告要旨参照)

## 二十四回日本篆刻展授賞式



## 授賞式

授賞式は五月二五日、大阪市のホテル大阪ベイタワーで開催され、二六四人が参加した。第二十四回展の概要報告・本年度審査員紹介のあと授与に移った。公募の部から会員の部、委員の部と各賞の代表に、寄託賞と常任委員、評議員の部の各賞は各人に理事長から賞状・賞品が手渡された。続いて来賓が紹介され、代表して駐大阪中国総領事館李哲領事と中国芸術研究院篆刻芸術院駱凡凡常務副院長が祝辞(要旨別掲)を述べた。最後に受賞者を代表して大賞受賞者の山谷加津子氏から謝辞があり授賞式は厳粛な雰囲気うちに終わった。



## 出品者懇親会

授賞式に引き続いて出品者懇親会が同所で開催された。授賞式参加者に加えて、展覧会等の支援をしている関係企業の代表者が来賓として加わり、受賞者を中心に華やいだ雰囲気の中で進められた。来賓を代表して中国芸術研究院篆刻芸術院韓天衡院長が祝辞(要旨別掲)を述べた。続いて、協会から中国紅十字会あての中国四川省大地震見舞の義援金が大坂総領事館代表に寄託された。来賓の大坂府日中友好協会大藪二朗事務局長の乾杯で宴に移った。席上、梅舒適賞・大賞・準大賞の受賞者が壇上で紹介された。



## 中国からの訪日代表団

中国芸術研究院篆刻芸術院にとって初の海外交流展となる本展にあわせて中国からの代表団が訪日した。当初、中国芸術研究院王文章院長を団長にと準備が進められていたが、政府要職にある同氏は直前に発生した中国四川省大地震対応のため国外に出ることができなくなり、夫妻とも訪日を中止し、急遽韓天衡氏が団長を務めた。(研究院への報告要旨別掲)

## 梅舒適賞に 出田塘葭、松本雅至の二氏



今年度から協会賞を改称し、創設者の名をとり梅舒適賞となった初の受賞者に出田塘葭・松本雅至の二氏が選ばれた。この賞は評議員から選考委員会で選出され、受賞者は理事候補として推薦されることとなっている。両氏とも日展入選歴のある実力者で、今後の活動が期待される。

常任委員を対象とする大賞には山谷加津子氏、準大賞には田澤翠雨・正和香葉・北野河聲・石原雲木・酒井好雨・中島大夢・高嶋満喜の各氏が選ばれた。受賞者は役員資格の評議員候補として推薦されることとなっており、大いに活躍が期待される。



## 中国芸術研究院から視察団が訪日

中国芸術研究院中国篆刻芸術院では、四月六日から一六日まで中国北京にある「中華世紀壇」において「金石永寿・中国第一回寿山石篆刻芸術展」を開催する。その海外巡回展の第一の開催地に大阪をと協議が進められている。それは、日本篆刻家協会が毎年中国と交流展続けているが、二〇年にわたり各省と進めていること、梅舒適前理事長が日本唯一の中国篆刻芸術院顧問であり相互に交流先として相応しいことから。

交流展開催の具体的協議と会場等の視察のため代表が訪日することになり、日本篆刻家協会総会に合わせて日程が組まれた。訪日団のメンバーは団長賈磊々芸術院助理(副院長)、副団長駱芃芃篆刻芸術院常務副院長、葛冰華篆刻芸術院副研究員の三人。訪日スケジュールの概要は次のとおり。

二月十三日(水)東京成田着。十五日(金)大阪市立美術館表敬訪問視察。大阪市美にて理事長代行、副理事長で協議。十七日(日)協会総会で賈磊々副院長挨拶。懇親会で駱芃芃副団長挨拶。十九日(火)関西空港から帰国。

## 王文章、韓天衡先生が来日予定

四月の北京での「金石永寿・中国第一回寿山石篆刻芸術展」には日本篆刻家協会から代表が訪れ、五月の日本篆刻展に合わせて中国芸術研究院王文章院長を団長に中国篆刻芸術院韓天衡院長や篆刻芸術院関係者数人が来日することになっている。

中国芸術研究院中国篆刻芸術院  
駱芃芃常務副院長の  
授賞式でのスピーチ

尊敬する日本篆刻家協会理事長山下方亭先生、副理事長尾崎蒼石先生、井谷五雲先生、尊敬する日本篆刻家協会の全

ての皆様、ご列席の皆様、こんにちは。まず、中国芸術研究院院長王文章、中国芸術研究院中国篆刻芸術院院長韓天衡になり代りまして、第二回日本篆刻展、そして「金石永寿—中国第一回寿山石篆刻芸術展」の成功に対し、またこの度の受賞者の皆様方に対し心よりお祝い申し上げます。

ご存じのとおり数日前に中国四川省汶川地区でマグニチュード八・〇の大地震が発生しました。被災地人民は大きな苦痛と災難にみまわれています。私たちは中日合同展覧会を順調に進めるために予定通り来日いたしました。中国から大阪への道中、団員の気持は沈み、心が休まりませんでしたが、日本に到着するやいなや日本篆刻家協会の幹部の皆様方には我が国の地震災害に対して非常に気にかけていただき、すぐさま協会会員の皆様方から中国の被災地への義捐金を募るといふ支援の措置を講じてくださり、代表して、また被災地の中国人民になり代り、日

本篆刻家協会に対して心からの敬意と感謝の意を表す次第でございます。

中国芸術研究院は中国社会科学院、中国科学院と並ぶ中国三大院の一つであり、音楽、美術、演劇、舞踏、篆刻、書道など多岐にわたる芸術の研究と創作を集めた総合機関であります。院では、梅蘭芳、程硯秋、王朝聞、黄寶虹、周汝昌など、各学科で卓越した成果をおさめた多くの専門家や学者を集め、また育成してきました。

中国篆刻芸術院は中国芸術研究院に属する中国で初の、そして唯一の中国篆刻芸術の研究と創作を核とする国家レベルの機関です。最大の任務は中国篆刻芸術を独立した学問の分野として作り上げることです。中国篆刻芸術院の主な役割は篆刻芸術の理論研究と創作実践を整え、かつ発展させることで、また篆刻芸術学科の修士と博士を育成することです。今年、中国篆刻芸術院では外国からの院生の募集を開始しました。これも中国の篆刻芸術を広めて伝承するために歩み始めた力強い第一歩です。

中国篆刻芸術院では成立以来二年の間に四度の展覧会を行いました。今回は初の海外での展覧会です。この展覧会は日本展の前に北京の中華世紀壇で開催されました。北京の展覧会では展示総延長は二千メートル余り、ロビーの入口では展覧会のビデオを放映しました。展示室はテーマ創作、自由創作、經典印章、及び貴重印材に分けられました。展覧会は

大成功をおさめ、また大きな反響を呼びました。中でも貴重印材と經典印章の展示室の設計は開放式書齋式としました。観衆は自由に印譜や図書を手にとって閲覧したり、お茶や琴を楽しみ、印材を鑑賞しました。観衆は正に中国伝統文化芸術の集大成の審美を享受することができたのです。今回日本で展示した作品はテーマ創作室に展示された全作品……『論語』警句と『道德経』警句……です。百余名の中国全国の最も有名な篆刻家による集団創作である『論語』警句と『道德経』警句、篆刻特有の形式により中国国学の經典を温め直したのは中国ではこれが初めてで、また日本でも初めてです。中国篆刻芸術院と日本篆刻家協会は共同で二つの「初めて」を創りあげました。(後略)





## 韓天衡院長の懇親会でのスピーチ



尊敬する山下理事長、井谷、尾崎両副理事長、幹部のみなさま、ご列席の皆様

本日、貴国を訪れた中国篆刻芸

術院の訪日団一行は非常に感激しております。そしてご列席の受賞者の皆様方に心よりお祝い申し上げます。このような祝賀の席において貴国の北から南まで全国各地からのこのように多くの篆刻家の皆様方と一堂に会するということはまたとない機会でございます。先ほど山下理事長より我が国の元政治局常務委員、副総理、李嵐清氏の著書である篆刻集「篆刻原来如此有趣(篆刻とはこんなに面白かったのか)」についてのお話がありました。李嵐清氏のこの本は中国篆刻界において非常に大きな影響力と推進力をもつものです。私も山下理事長のお話から派生させていただいて「もし多くの政治家が筆を持ち、刀を手にして印を彫ったならば、この世界は更に合理的に平和になるであろう」と思います。古人は言いました「雕虫小技 丈夫不为(雕虫小技にして丈夫は為さざるなり)：取るに足りないような技能を一人前の人間はしない」。印を彫ることは小さな芸術であるので、真に成就ある人間は

こんなこと(篆刻)はしないものである。

これは千八百年前の一部の古い文人が我々のこの芸術に対して下した定義であります。だから私は時々冗談でこう言います。「雕虫小技 丈夫難為(雕虫小技にして丈夫は為し難し)：取るに足りないような技能であるが、一人前の人間でもするのは難しい」。印を彫ることは小さな芸術であるが、誰でも上手にできるというわけではない。千八百年前にこの言葉を残した揚雄は有名な学者でした。しかし千八百年後にこの「雕虫小技」が全世界にこのような大きな影響を与え、多くの愛好者を生み、そして多くの篆刻家を作りだすとは、当時揚雄も思いもしなかったことでしょう。

篆刻芸術は中国では今、斬新な時代を迎えています。我々上海の非公式の統計によりますと、現在上海で印を彫ることのできる人は約十万人います。(後略)



## 訪日団の研究院への報告要旨

「金石永壽—中国第一回寿山石篆刻芸術展」海外巡回展の第一番目の場所として、二〇〇八年五月二〇日から二五日まで「中国第一回寿山石篆刻芸術展第二回日本篆刻展」と題する中日篆刻合同展覧会が日本の大阪市立美術館で盛大に開催された。中国芸術研究院中国篆刻芸術院韓天衡院長、駱凡常務副院長をはじめとする訪日団は五月一八日から二日間わたって日本を訪問し、視察や篆刻芸術の交流を行った。

日本篆刻家協会は日本の関西地区で最大の篆刻家協会であり、日本の篆刻芸術の主流をなしており、会員総数は二〇〇〇名余り、創立時の理事長は梅舒適氏、現在の理事長は山下方亭氏である。二〇〇六年の中国篆刻芸術院の創立から現在までの間、山下方亭氏は団を率いて三度訪中し、中国篆刻芸術院創立記念大会、中国篆刻芸術院創立一周年記念活動、そして本年四月に中華世紀壇で行われた「金石永壽—中国第一回寿山石篆刻芸術展」に参加し、中日篆刻芸術交流の積極的な推進に重要な貢献をした。今回中日両国が共同で成功裏に篆刻芸術合同展を開催したことは日本篆刻史上初めての事であるばかりでなく、中国篆刻芸術が独特なテーマをもっての創作という形式で海外に展開していく積極的な試みであり、中日両国の文化交流に重要な架け橋の役割を果たした。

今回の展覧会での中国側の展示作品は

「金石永壽—中国第一回寿山石篆刻芸術展」の中から『道德経』、『論語』の警句を内容とした一三五方の主題創作の篆刻のオリジナル作品である。印章の原石、印拓、側款、及び拡大作品である掛軸の他、中国国学経典の字句や中国寿山石文化を展示し、日本の観衆に紹介した。日本側は日本篆刻家協会理事長山下方亭氏、副理事長尾崎蒼石氏、井谷五雲氏をはじめ、多数の理事や会員の篆刻作品を展示し、日本の篆刻界の現在の創作風格と芸術水準を集中的に展示した。また、日本篆刻家協会前理事長梅舒適氏の「蘭室言蔵中国古印材展」も特別展覧として展示され、中国伝統文化の味わいを醸し出した。

展覧会終了後の授賞式では、まず日本篆刻家協会理事長山下方亭氏が挨拶し、今展覧会に対する中国側の多大なる協力に対し謝意を表明した。続いて中国篆刻芸術院駱凡常務副院長が中国側を代表してあいさつ、中日両国の篆刻芸術の発展に対して、時代に合致した生活に密着した新しい提案を行い、今後とも両国芸術家が固い友情で結ばれることを祈念した。引き続き行われた祝賀レセプションで韓天衡院長は、中国の篆刻家と日本および他の国と地域の篆刻家は共同努力して篆刻芸術の新しい段階を迎えようとして述べた。中国代表団、中国駐大阪総領事館文化参事官李哲、在日篆刻家協会、晋陽、梁章凱、韓天雍、日本篆刻家協会会員、および関係者がこの盛会に出席した。(後略)



# 第一回中央研究会が開催される



協会トツが交代し初の企画による行事として、第一回中央研究会が八月二日から四日まで二泊三日の日程で兵庫県明石市のグリーンヒルホテル明石を会場に開催され、全国から九十五人が参加した。

研究会は二日午後から、「古代中国社会の生活」と題する山下理事長による講演で始まり、井谷副理事長から記念分刻の課題「袁枚編、百美新詠」の解説が行われた。夕刻から翌日にかけて参加者はそれぞれの分刻課題に取り組んだ。

今回の特色の一つとして、参加者を十三、四人ずつ七つの研究班に分け正副理事長、代表理事が指導者に就いて、平素の指導者と違う指導を体験する試みが実施され、夕食後、そこに指導者を中心とする輪ができていた。

第二日午後は、大阪芸術大学客員教授文学博士久米雅雄氏の『金印・銀印ものがたり』国宝金印「漢委奴国王」印から「親魏倭王」印までと題する講演が行われた。引き続き「わたしの逸品」と題し常務理事以上の役員が持参した自慢の一品の展示と解説が行われた。夜は全国各地からの参加者が一堂に集い夕食をかねた記念懇親宴会が開催され交流を深めた。

最終日四日は、尾崎副理事長が分刻課題の講評。理事長が「初の研究会」のまとめをし、昼前に解散となった。

なお、参加者による記念分刻課題の印は秋に書籍として発行される予定とのこと。

## 研修会報告

### 第一回研修会

九月三日「琴心篆会による」側款の刻し方と拓の取り方」の研修会が一八名の参加者を得て開催された。午前一〇時より昼食後は対聯の書き方も加え、約五時間巨り指導を受け、琴心篆会会員は熱心に学習した。講師 山下方亭理事長。

### 第二回研修会

岐阜篆会(関中印社、好日会、川平印会、長修篆会、亡羊印会)於関市学習情報館。九月一四日午後二時〜四時半。講師 山下方亭理事長。

### 「説文解字叙」について

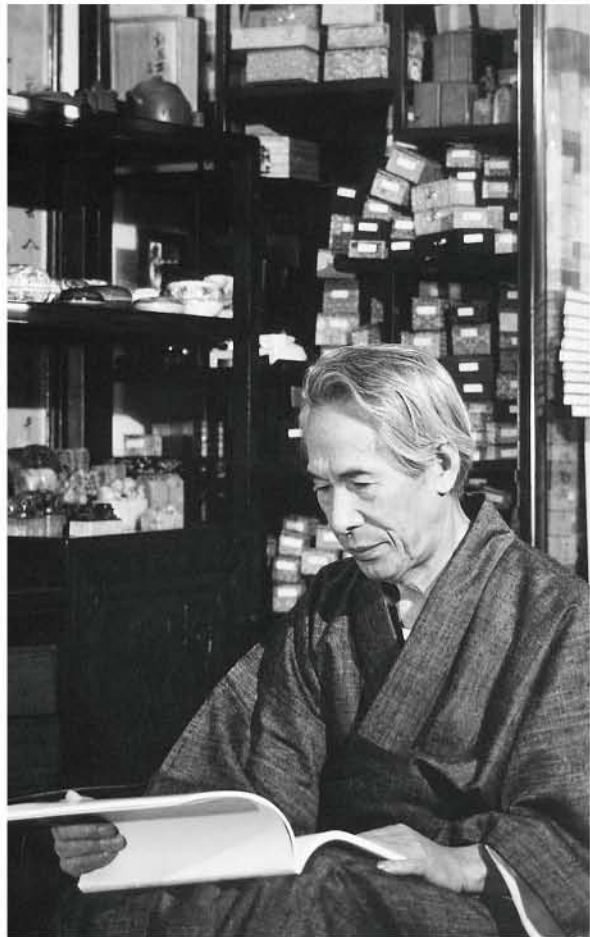
説文学習の以前にこの叙の内容を理解。許慎が五四〇の部首をたてて九三三三文字を解字したがそれを読み説くには叙文の理解が不可欠である。説文解字の為の予備知識としての必須である説文解字叙を学習した。参加人数は四五名。参考資料として叙文の訳文、揚沂孫の篆法指南(部首と叙)・訓説説文解字(東海大学古典籍出版部)

### 来年の中央研究会の会期、会場決定

本年は会場の都合で一〇〇名限定の爲役員から参加を募り、残りを印社割当の結果となったが、来年八月八日〜一〇日二泊三日・舞子ビラは約三〇名の宿泊を予約。来春、協会会員全員に案内する。又、計画では創立二十五周年の記念講演として阿辻哲次先生に「説文解字」について講演をしていただく予定。詳細は未定ながら会期、会場は決定しておりスケジュールに入れて頂きたい。(研究部)



# 梅舒適先生逝去



篆社を主宰し、日本篆刻家協会の創設者で初代理事長を長らく務めた読売書法会顧問、日展参与、日本書芸院最高顧問の梅舒適先生(ばい・じよてき、本名稲田文一)いなだ・ふみかず)篆刻家、書家)は八月二十七日肝臓ガンで逝去された。享年九十三歳。

大阪市で生まれ、大阪外国語学校(現大阪大学外国語学部)を卒業。辻本史邑・河西笛洲に師事して書・篆刻を学び、一九四八年に篆刻・金石・書法の研究団体「篆社」を創設多くの弟子を育て、関西書壇で活躍。日本書芸院の理事長、事務総局長を務め、関西書壇のレベル向上、作家育成にも尽力した。国内のみならず中国にも名をはせ、北京等中国各都市での篆刻交流展を約二〇年わたって続けた。中国西泠印社名誉副社長、上海交通大学客員教授、日本中国友好協会顧問など日本・中国両国での役職を歴任し、書法・篆刻の発展と日中の民間交流に努めた。

## 協会で月例作品募集

篆美の課題による月例作品の学習の役割は協会の会員増加や、篆刻の継続に大いに役立ったと思われる。先の中央研究会の折、印社代表による懇談会の席上でも速急に解決して欲しい旨多数の方からご意見がでた。企画委員会で協議の結果諸々の問題は後日クリアするにして取り急ぎ会報に課題を発表して作品の募集を開始する。年二回の会報で発表するの

で製作に入ること。  
詳細は企画委員会で検討して次号までに要項と発表の形式を決定する。  
※今回は十月までの課題を十一月末日必着で下記に送付のこと。

## 日本印人の印をお貸し下さい!

来年の二十五回展の記念事業として「日本中国印譜(仮称)掲載の印を役員に借用依頼をしたところ中国印人は略目標の数に達している。日本の印人の印が少なく会員各位にもお願いして『篆社に関わる故人の印』を借用したい。

### 今回の課題

- 墨場必携(市河米莚輯)  
四字秋類から
- ・八月……舒芳振條
  - ・九月……天高氣清
  - ・十月……登山臨水
  - ・十一月……夢風葭露
  - ・十二月……乾坤純和

- 印の大きさ……一寸以内
- 毎月未締切。協会事務所に郵送。
- 当面は半紙半截に月と姓号を記入。(篆社印箋使用可)
- 送り先

〒五六三-〇〇三三  
池田市石橋二丁目二一〇  
牧野ビル二〇三号  
日本篆刻家協会 月例作品係宛

広瀬加陽 森川二華 角田三谿  
榊原星卿 野田紫城 粕谷篁堂  
大島芳雲 村上石堂 所洞谷  
河北憲昭 杉本長雲 田中对泉  
土屋雲廬等々。

- 所有の方は協会事務所迄、作者と印影をFax願いたい。
- 締切日十一月末
- 問い合わせ 担当真鍋井蛙



